

< 研究成果の紹介 >

アテモヤの棚仕立て栽培における品種特性

農業研究部 紀南果樹研究室

1. 成果の内容

東紀州地域は柑橘類の栽培が盛んです。しかし、近年柑橘類、特に温州ミカンが隔年結果をおこすことで豊凶作を繰り返し、価格の変動を招いています。このことにより農家の経営は不安定になっています。そこで農家経営安定のための補完作物としてアテモヤの導入の可能性を検討しました。

アテモヤは、亜熱帯果樹であるチェリモヤとバンレイシの交雑種として、オーストラリアで発見されました。栽培には0℃以下にならない条件が必要で、日本国内では栽培面積は少ないものの沖縄や鹿児島といった地域で導入が試みられています。

今回、東紀州地域に導入するに当たり、栽培に冬季の加温が若干必要となることから既存のハウスミカン栽培用の施設を利用した栽培方法を試みました。供試した品種は「ピンクス・マンモス」、「ヒラリー・ホワイ特」、「アフリカン・ブライド」、「QAS」の4品種です。

アテモヤは樹勢が強いことから、栽培は棚仕立てとして樹勢の安定に努めました。その結果を報告します。

- 1) 樹体生育は、全ての品種で順調でした。他の品種と比べた場合「ヒラリー・ホワイ特」はやや劣るようでした（表1）。
 - 2) 果実の収穫は11月頃で、収穫後10～20日間の追熟が必要です。追熟後の糖度は年により差が見られますが15度～30度と非常に高くなります（表）。
- 糖度は「ピンクス・マンモス」が高くなりました。

- 3) 収量は「ヒラリー・ホワイ特」が3.5 kg/m² (3.5 t/10a) と最も多く、ついで「ピンクス・マンモス」が多くなりました。

表1 品種別の樹体生育と品質

品種名	樹冠占有面積(m ²)	果実重(g)	糖度(%)		収量(kg/m ²)
			H11	H12	
ピンクス・マンモス	9.8	784	29.4	18.3	1.5
アフリカン・ブライド	4.9	393	21.3	16.1	0.6
ヒラリー・ホワイ特	3.1	494	30.2	15.3	3.5
QAS	12.9	217	—	16.3	0.5

供試樹の樹齢はH12時点で4年生

た。

- 4) アテモヤは雌しべが先に成熟するという特徴があるため、人工受粉が必要になります。受粉に使用する花粉は品種を問いませんが、同一品種内で人工受粉を行なった場合、採取当日花粉では60%程度の結果率でした。冷蔵貯蔵を行なっても2日間程度で結果率が低下してしまいます（図）。

2. 技術の適用効果と適用範囲

東紀州地域に導入する場合、0℃以上の加温ハウスで栽培することで十分栽培が可能で、農家の経営安定に利用できると考えられます。

3. 普及・利用上の問題点

アテモヤは樹勢が強いので棚仕立て栽培以外の栽培方法についてはさらに検討が必要です。

(竹内 雅己)



写真1 「ヒラリー・ホワイ特」果実

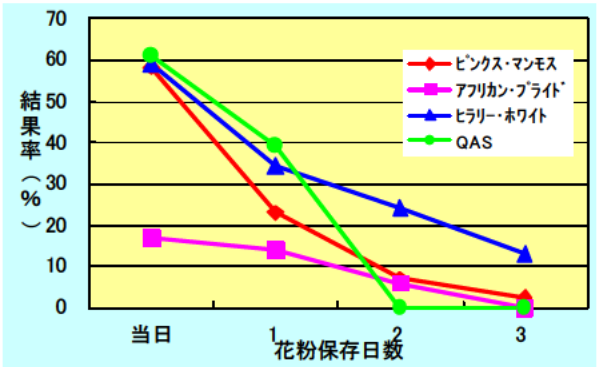


図1 花粉保存日数と着果率の推移 (H12)